
サイレント・レイン

さとちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サイレント・レイン

【Nコード】

N3763D

【作者名】

さとちゃん

【あらすじ】

コーラ屋の主人公と弁当屋のカオリの交流を描く。

1章

「いらつしゃいませー。お弁当いかがですかー」

隣の弁当屋が大声で売りさばいているが一向に売れる気配がない。それもそのはずだ。外はひどいどしゃぶりで傘を差した人も急ぎ足で去ってゆく。

その日は10月にしては冷たい雨が降っていた。

私は晴海で開催されている東京モーターショーのコカ・コーラ売り場でバイトをしていた。重ねたビンのケースをネコで押し指定の売り場まで運んでゆく。ネコとは業界用語で、簡単にいうとコーラ専用の台車のことを指す。重心を移動して押してゆくが、その重心の位置が微妙に違うとモロに腕に重さが加わりとんでもない痛さを味わうことになる。

東京モーターショー会場の特設野外テントの中では、仲良く私たちコーラ屋と近所から来た弁当屋が1つ屋根の下で同居していた。

弁当屋は朝早く今日1日の売り上げを予想して会場で弁当を運んでくる。土曜、日曜には飛ぶように売れていき、午後の3時を過ぎればすべて売り切り閉店してしまう。しかし、思いもかけず天候に左右されると予定した数量の半分も売れないで残ってしまう。今日みたいに日曜でも寒い雨が滝のように降っていたんでは人も会場の外へ出ず、弁当も冷たくなるばかりだった。午後だというのに弁当屋には日曜のために用意した弁当が山のように積み上げられ売れ残っていた。

私たちコーラ屋は紙カップ売りで、コーラやファンタ、それにウーロン茶などを売っていた。当然、この雨と冷たさではコーラを買いにくるお客はまばらで、ほとんどは室内の自動販売機や室内売店を利用していた。私は先輩社員から何度も呼び出されて、ネコに身長以上の高さにもなるコーラを積み上げて室内売店や自動販売機の

補充で目が回るほど忙しかった。

私の服や髪の毛はこの雨のせいで水分をたっぷり吸い込んでいた。

「ひどい雨ですよ。よかつたらこれ使ってください」

白いタオルを弁当売りのバイトにきていた力オリが差し出した。私が何度も行ったり来たり、このひどい雨の中をずぶ濡れになってネコを押している姿をトレーナーの袖を伸ばしその中に手を潜り込ませ背中を丸くしながら見ていた。弁当屋は暇だったせいで体を動かすこともなく、風が素通りするテントの中は寒かった。

「すみませんです。ありがとう。じゃ、ちよつとだけ」

憧れのコカ・コーラの専用ジャンパーがどつぷりと雨を吸い込んでいて超重たい。このバイトも実はこの憧れのジャンパーが欲しいがためにしたものだった。モスグリーンのフランネルウールで仕上ったジャンパーにはコカ・コーラのロゴがきれいに刺繍されている。それは暖かく重量感があつてすごく気に入っていた。そのジャンパーを脱ぎたっぷり吸い込んだ雨を絞った。まるで風呂上りのような髪の毛もびしょ濡れだった。

「コカ・コーラのバイトって大変ですね」

猫のように丸まった力オリは寒さで体を少しだけ震わせていた。

「しかたないっす。バイトっすから」

濡れた髪をタオルで拭くとタオルも絞れば水滴が落ちそうだった。「弁当どうすか？売れてますか？」

見ればわかる光景も挨拶がわりに聞いてみた。

「うっん。ぜんぜん」

それはそうである。この雨の中、お客は会場の外には出てこない。「寒いですね」

力オリは今度は足踏みをしながら寒さを我慢していた。

「そうっすね」

たしかに寒かった。降りしきる雨を見ながら空を見上げた。

「なんか、びしょびしょになっちゃって」

濡れてしまった純白のタオルをカオリに返した。

「ううん」

私は休む間も無くまたコーラを仕込んだり、ボトルをセットしたりして急がしかった。硬く絞ったフランネルウールのジャンパーは体の熱のせいで軽く蒸気が立ち上がっている。

「あー、腕痛えーなー」

「どうしたの？」

「え、見てくださいよこの腕を。やたら重くって気がついたらこのザマっす」

そう言つて、コカ・コーラのジャンパーの袖を捲くつてカオリに見せた。ちょうどくるぶしのあたりが両腕とも青いアザになっていた。

ネコで重いコーラを運んでゆくが、初心者バイトではその重量配分をうまくコントロールできない。無理に腕で重さを支える内、腕を痛めさらにそれをかばう内今度は逆の腕を痛めてしまう。結局、両方に大きな青アザをこしらえることになる。私の両腕は痛さが限界にきていた。

「うわー、痛そう。だいじょうぶ？」

トレーナーに隠れた手を口元へ運んだ。

「痛いっすよ。ったく。この雨のせいっすよ。やってらんないっすよ」

外は降りしきる雨で人気はないが、モーターショーの会場の中に入れば、人がごった返し熱気があった。コーラも飛ぶように売れてゆく。

「おい、バイト。ちょっとく行つてくれるか」

赤い車で通りかかった先輩が応援しろと運転席から顔を出し指を指した。

「ちえ、ついてねえや。また呼び出しかよ」

「忙しそうね」

「まあね。さっきの社員が会場内のコーラを補充しろってさ。なん

でもさ、飛ぶように売れていて人手が追いつかないんだよね。だから、またちよつと頑張ってきます」

また、冷たい雨の中をネコでコーラを押しながら、売り切りになった自動販売機にコーラを補充してゆく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3763d/>

サイレント・レイン

2011年1月8日15時19分発行